大阪府

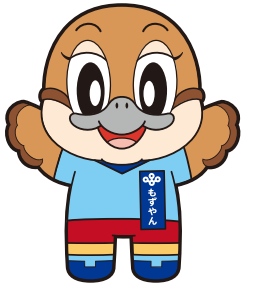
# 第43回人権啓発
# 詩・読書感想文
# 入選作品集

## みんなでかんがえよう　みんなのじんけん

主催／大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会（愛ネット大阪）
協賛／江崎グリコ株式会社、大栗紙工株式会社(OGUNO)、
大阪地区トヨタ各社、関西エアポート株式会社（五十音順）

## 今回の入選者のみなさん

令和7（2025）年1月26日（日）　ピースおおさか（大阪国際平和センター）




大阪府広報担当副知事　もずやん

令和7（2025）年2月発行

主催　大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会（愛ネット大阪）

# 目次


第43回人権啓発詩・読書感想文募集・表彰事業について……2

詩の部門

**小学校（小学部）低学年の部**

ぼくのじいちゃん……4

**小学校（小学部）高学年の部**

私なりの人権……6
大丈夫……8
大事なこと……10
ものさし……12
好き……14
言い方で変わる心の葉っぱ……16
ことだま……18
笑顔をもらった私……20
ずっと忘れない……22
幸せだから笑う……24
見方を変えると……26
差別がなくなったらいい……28
じんけん……30
人権って何？……32
ありがとう……34
全部できなくても……36
子どもの権利……38

**中学校（中学部）の部**

人間のいいところ……40
差別……42

読書感想文の部門

**小学校（小学部）低学年の部**

ペンギン……44

**小学校（小学部）高学年の部**

子どもの権利ってなぁに……46
「焼き肉を食べる前に。」……48

**中学校（中学部）の部**

「手で見るぼくの世界は」を読んで……50
桃太郎と鬼……52
人生の「色」……54
ぜんぶ自分の自由……56
声……58
「ないものねだり」の世界は……60
人からの評価……62

講評……64

## 第43回人権啓発詩・読書感想文　募集・表彰事業について

一人でも多くの方に人権について身近に考えていただくため、人権の尊さやお互いの人権を守ること、差別のない明るい社会を築くことの大切さや平和の尊さを訴えることなどをテーマに、人権啓発詩・読書感想文を、府内在住・在学の小・中学（部）生から募集しました。

○主催

大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会（愛ネット大阪）

○募集期間

令和６年７月１日（月）～８月30日（金）

○応募、審査

詩部門・読書感想文部門合わせて1,052作品の応募があり、審査会において30作品を入選としました。

詩部門

小学校（小学部）低学年の部

| | | |
|---|---|---|
| 阪南市立西鳥取小学校 | ３年 | 池田（いけだ）　優馬（ゆうま） |

小学校（小学部）高学年の部

| | | |
|---|---|---|
| 大阪市立みどり小学校 | ５年 | 服部（はっとり）　紗知（さち） |
| 大阪市立関目東小学校 | ６年 | 稲葉（いなば）　友優（ゆう） |
| 寝屋川市立宇谷小学校 | ６年 | 吉村（よしむら）　望結莉（みゆり） |
| 寝屋川市立神田小学校 | ６年 | 小林（こばやし）　恒河（ごうが） |
| 寝屋川市立石津小学校 | ６年 | 田中（たなか）　詩（うた） |
| 寝屋川市立第五小学校 | ６年 | 市川（いちかわ）　千尋（ちひろ） |
| 寝屋川市立第五小学校 | ６年 | 小倉（おぐら）　早穂（さほ） |
| 寝屋川市立第五小学校 | ６年 | 吉中（よしなか）　明日美（あすみ） |
| 寝屋川市立第五小学校 | ６年 | 松下（まつした）　寿也（ひさや） |
| 寝屋川市立第五小学校 | ６年 | 上垣内（うえがいと）　彩羽（いろは） |
| 寝屋川市立望が丘小学校 | ６年 | 小島（こじま）　望愛（のあ） |
| 寝屋川市立木田小学校 | ６年 | 岡田（おかだ）　彩巴（いろは） |



| | | |
|---|---|---|
| 東大阪市立英田南小学校 | ６年 | 髙倉（たかくら）　彩希（さき） |
| 東大阪市立英田南小学校 | ６年 | 森本（もりもと）　悠暉（ゆうき） |
| 東大阪市立英田南小学校 | ６年 | 西田（にしだ）　悠琉（はる） |
| 泉南市立新家東小学校 | ５年 | 直江（なおえ）　潤（じゅん） |
| 泉南市立東小学校 | ５年 | 鈴木（すずき）　彼方（かなた） |

中学校（中学部）の部

| | | |
|---|---|---|
| 交野市立第四中学校 | ２年 | 源（みなもと）　千遥（ちはる） |
| 泉南市立泉南中学校 | １年 | 西光（さいこう）　優樹菜（ゆきな） |

読書感想文部門

小学校（小学部）低学年の部

| | | |
|---|---|---|
| 阪南市立上荘小学校 | ２年 | 川北（かわきた）　美波（みなみ） |

小学校（小学部）高学年の部

| | | |
|---|---|---|
| 泉南市立雄信小学校 | ４年 | 今野（こんの）　彩心（あこ） |
| 阪南市立桃の木台小学校 | ５年 | 植田（うえだ）　孝太郎（こうたろう） |

中学校（中学部）の部

| | | |
|---|---|---|
| 堺市立津久野中学校 | １年 | 小西（こにし）　希美（のぞみ） |
| 堺市立津久野中学校 | ２年 | 山口（やまぐち）　珠（たまき） |
| 堺市立津久野中学校 | ３年 | 重本（しげもと）　美侑（みゆ） |
| 交野市立第四中学校 | ２年 | 久保（くぼ）　夏希（なつき） |
| 交野市立第二中学校 | ３年 | 脇田（わきた）　優希（ゆうき） |
| 交野市立第二中学校 | ３年 | 田口（たぐち）　璃桜（りお） |
| 阪南市立鳥取中学校 | ３年 | 東條（とうじょう）　智佳（ともか） |

○表彰式

令和７年１月26日（日）　ピースおおさか（大阪国際平和センター）

# 詩の部門

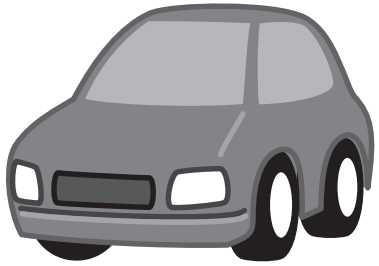
## 小学校（小学部）低学年の部

### ぼくのじいちゃん

阪南市立西鳥取小学校　三年　池田　優馬

ぼくのじいちゃんの車の色はピンク色だ
ピンクの車で
ぼくをいろんな所へつれて行ってくれる
ある時
じいちゃんの車を見てわらう人がいた
なにがおかしいんだろう
なんでわらうんだろう
みんなそれぞれ
すきな色があっていいじゃないか

ピンク色のじいちゃんの車
かわいくて
かっこよくて
ぼくは大すきだ。



小学校（小学部）高学年の部

# 私なりの人権

大阪市立みどり小学校　五年　服部　紗知

自分らしさってなんだろうか。
男らしく、女らしく、なんてことを聞いたりするけれど、わからないな。
自由な世の中って言われるけれど、
自分が自由なのか、わからないな。

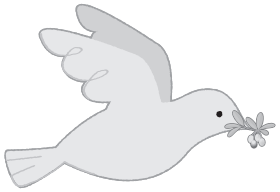
日本は昔、戦争をしていて、
食べる物も、
住むところも、
着る服も、
考え方や、発言だって、
自由ではなかったんだって。

今は、もうずっと戦争はしていなくて、
毎日、平和にくらしている。
好きなことをさがすことができて、
たぶん、自分らしさについて考えることも、
できる。
ああ、これってきっと、
自由なんだろうな。



自分らしさってなんだろうか。
あいかわらず私にはよくわからないけれど、
それってきっと、
自由が当たり前であってこそなんだ。
今の自由をかみしめて、
当たり前の自由に、甘えないようにしなくちゃな。

自分が良ければ、それでいいわけじゃないことだけは、少しわかったかもしれないな。
人に優しくできるようになれば、
自分らしさも見つかるかもしれないな。



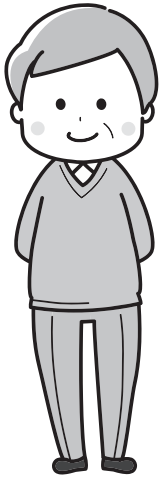
# 大丈夫

大阪市立関目東小学校　六年　稲葉　友優

大丈夫だよ
言ったことを忘れても
私が
もう一度言ってあげるから
大丈夫だよ
覚えてないって言ったって
私が
一緒に考えてあげるから
大丈夫だよ
私のことを忘れても



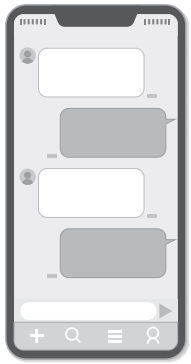
私が
絶対覚えているからね
私が
絶対忘れないからね
だって
じいじの心は私をきっと覚えてるって
信じてるから



# 大事なこと

寝屋川市立宇谷小学校　六年　吉村　望結莉

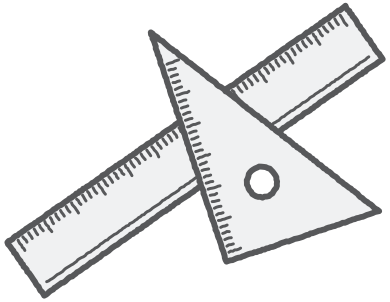
わらいながら言った言葉も
ＳＮＳではつめたくひかる
そんなつもりじゃなかったって
言いわけなんかはつうじない
だいじなことは目をみて言おう
まちがえたなら目をみて謝ろう
ＳＮＳでつたえやすい時代だからこそ
その声に笑顔にかちがある



# ものさし

寝屋川市立神田小学校　六年　小林　恒河

ものさしは長さをはかる
でもその長さはものだけじゃない
人の長所、短所をはかるものさしもある
そのものさしは人によって
はかれる長さがちがう
自分の長所か短所か見るとき
過去の自分の長さと比べる
なのに、なのに
比べなくていい他の人のものさしと
比べさせられる
はかれる長さがちがうものさしなのに



# 好き

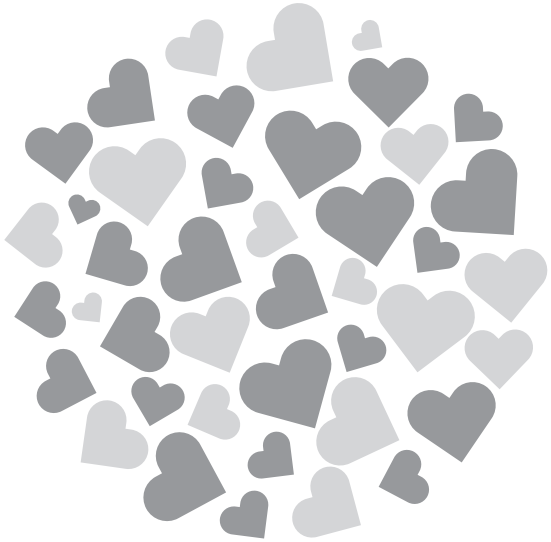
寝屋川市立石津小学校　六年　田中　詩

私は自分の好きが好き
自分にしかない考え
自分にしか出せない答え

私はキミの好きも好き
キミにしかない考え
キミにしか出せない答え

私は自分の好きを
好きって思える人が好き
誰かに否定されたって

自分を無理やり変えないで大丈夫
私は自分を好きでいたい



# 言い方で変わる心の葉っぱ

寝屋川市立第五小学校　六年　市川　千尋

軽い気持ちで言った言葉
受けとる人の気持ちはいろいろだね

うれしく感じた人
いやな気持ちになった人
かなしい気持ちになった人

その一言でいやな気持ちにさせてしまっても
あやまったって取り消せない

自分に正直でありたいけど
思ったままの言葉を言うのは少し違う

言葉をもっと深く知ったら
私の心の葉っぱはもっと増えるだろう

# ことだま

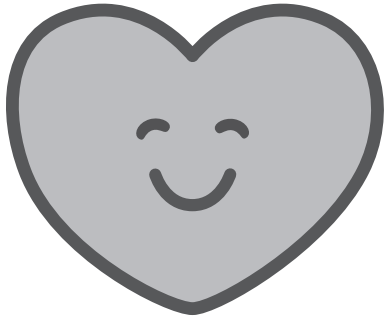
寝屋川市立第五小学校　六年　小倉　早穂

だれかが言った
つめたいことば
私のこころは重く、重く、暗くなる
私に言われたわけではないのに

だれかが言った
あたたかいことば
私のこころは軽く、軽く、明るくなる
私に言われたわけではないのに

ことばはきっと、なにかをかえる
小さくても、少しでもなにかがかわる

だれかが明るくなれる
光るほうへ輝くほうへと進める
そんなことばを私はつかいたい



# 笑顔をもらった私

寝屋川市立第五小学校　六年　吉中　明日美

私はダンスが好きだ
おどっていると楽しくなる

ある日言葉のちがう男の子が来た

「こわい」「伝わるか」と思った
そんな中一緒におどると男の子は
言葉がちがう場所、人の中
でもとても笑顔で楽しそうにおどっていた

次の日　また同じ男の子がいた
男の子と目が合ったとき男の子は笑顔で手をふってくれた

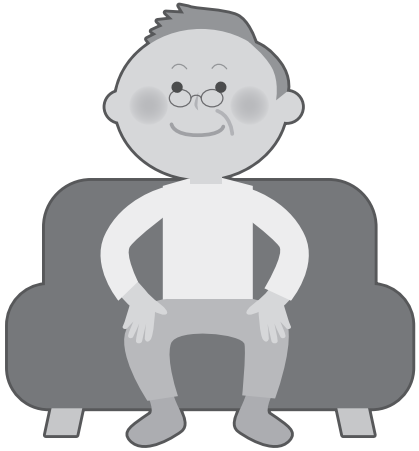
いつの間にか私も笑顔になっていた

# ずっと忘れない

寝屋川市立第五小学校　六年　松下　寿也

いいよ
何曜日か忘れても
ぼくが
教えてあげるからね
いいよ
おこっても
きっと
不安なんだろうね
いいよ
ぼくのこと忘れても
ぼくはおじいちゃんのこと

ずっと
忘れないからね



# 幸せだから笑う

寝屋川市立第五小学校　六年　上垣内　彩羽

私は笑った
心から笑った
いっしょに笑った友達も楽しそうだった
もちろん私も楽しかった

私は笑えなかった
心はおこっていた
友達は笑っていた
楽しそうだった
私はそれに腹が立った
目の前に苦しんでいる人がいるのに

助けずに笑っていたから
私は助けた
それを見て友達は去っていった
「笑う」ってすてきなものなのに
なんでそれをうばうのだろう

# 見方を変えると

寝屋川市立望が丘小学校　六年　小島　望愛

見方を変えると
毎日が楽しい

さわがしい人は
周りを明るくしてくれる

静かな人は
落ちついている

マイペースな人は
自分を大切にできている

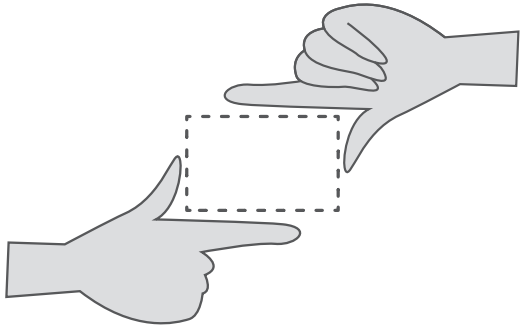
せっかちな人は
決断が早い



見方を変えると
短所が長所に

見方を変えると
その人の良さが見えてくる

見方を変えると
毎日が楽しい



# 差別がなくなったらいい

寝屋川市立木田小学校　六年　岡田　彩巴

私は男の子みたいな
格好をしている
髪の毛も短い
私はこの格好が好きだ
学校の帰りに
知らない人から
「あなた男の子みたいな格好して
はずかしくないの」
と言われた
私はこのとき
差別がなくなったらいいと思った

# じんけん

東大阪市立英田南小学校　六年　髙倉　彩希

「じんけん」それは
誰でも作ることができる
好きな色を選べること
好きなことができること
遊びたい人と遊べること
誰もが幸せに生きられること
このようなこと　全てじんけん

「じんけん」それは
誰でも壊すことができる
女子だからスカート
男子だからズボン
女子と男子は遊んじゃダメ
女子はピンク　男子は青
このようなこと　じんけん？
絶対に「じんけん」じゃない

じんけんは誰でも作ることができて
誰でも壊すことができる
そして誰でも守ることができる
「そんなん言う必要ある？」

この一言でその子の人生が変わるかもしれない
勇気を出せばその子が救われるかもしれない
一人一人勇気を出して言ってみよう

# 人権って何？

東大阪市立英田南小学校　六年　森本　悠暉

人権って何？
人権はみんなのプライバシーを守ってくれるもの

人権って何？
人権はみんなが平等にチャレンジできるもの

人権って何？
人権は「自分らしく」が通用するもの

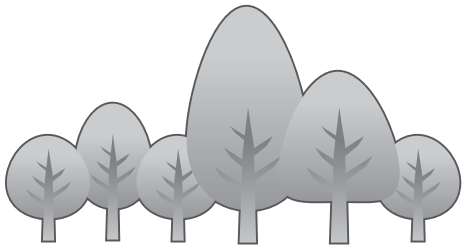
少しでも「バカ」や「しね」と言ってしまうと
人権侵害になってしまう
「知らなかった」は通用しない



みんなの支えになっている人権
そのルールを破るとみんなのバランスが崩れてしまう

このバランスを保つには一人ひとりの意識が必要
だからあなた一人が意識すれば
みんなの人権を守ることができる

少しでも悪口を言っていない？
これまでの自分を振り返ってみよう



# ありがとう

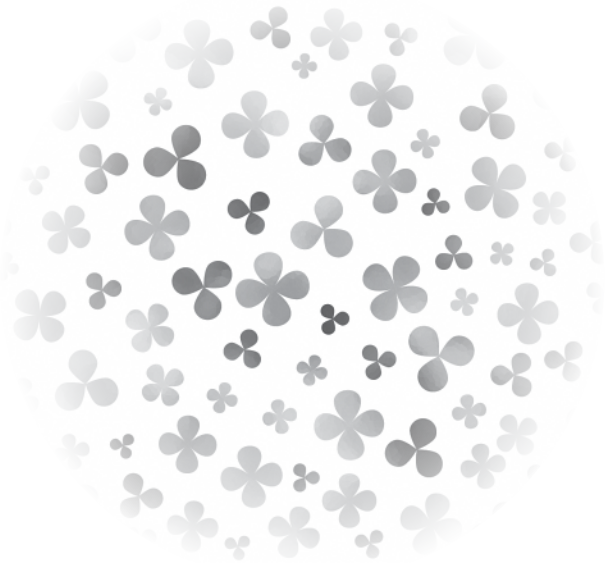
東大阪市立英田南小学校　六年　西田　悠琉

そのたった一言で
みんなが幸せになる言葉
ありがとう

そのたった一言で
心の込め方で伝わり方も変わる言葉
ありがとう

そのたった一言で
誰かの生きる燃料となる言葉
ありがとう

ありがとう
みんなが幸せになり
心を込めて言い
誰かの生きる燃料となる言葉
ありがとう



# 全部できなくても

泉南市立新家東小学校　五年　直江　潤

ぼくには苦手なことがたくさんある
大きな音が怖い
手が汚れるから書写や図工がきらい
不器用だからリコーダーが苦手
それでも投げ出さずにがんばっている
そして、クラスの仲間はそんなぼくを助けてくれたり、はげましてくれる

みんな、みてて
いつか得意な数字を使って、すごいことしてやるんだ
全部かんぺきにできなくても、ぼくは大丈夫
そして次はぼくが周りを助けるんだ

今のクラスのみんなみたいに

# 子どもの権利

泉南市立東小学校　五年　鈴木　彼方

子どもの権利
自分のわがままを通すためのもの？
自分だけ気持ちよくなるためのもの？
いや、違う
子どもの権利は
みんなが笑顔になるためのもの
私はこれを
大切にしたい

中学校（中学部）の部

# 人間のいいところ

交野市立第四中学校　二年　源　千遥

人間のいいところって
なんだと思いますか

障がいのある人
性別を決めたくない人
肌や髪や目の色が違う人
たくさんの人がいるこの世界

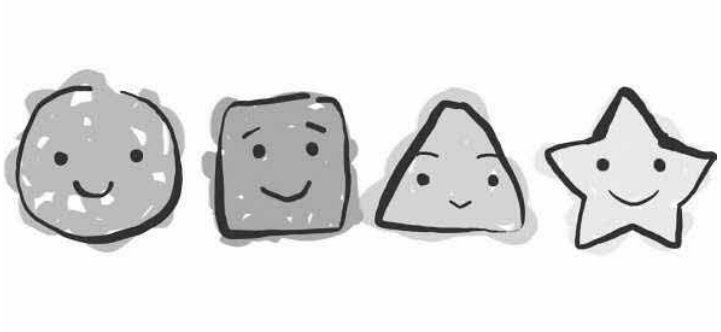
そんな世界の中に、
「普通」なんて言葉はありません
あってはならないのです

自分と少し違うから、
あの人ちょっと変なんだ
というあなたの自己判定
もうやめませんか

みんな違っていて当たり前
違うからこそ人間

そんな考えがあふれる世界が
一番かがやくのです

最後にもう一度聞きます
人間のいいところって
なんだと思いますか



# 差別

泉南市立泉南中学校　一年　西光　優樹菜

そこに差別をしている人がいる
あなたは止められる？
差別は人間が作ったもの
だから人間の力で止められる
差別をする人がいれば
必ず差別をされる人がいる
その人が傷つき、命を失うことだってある
そこに差別をしている人がいる
あなたは止めようとする
なぜなら
こわくて差別を止められないよりも
人の命の方が大切だからだ

# 読書感想文の部門

小学校（小学部）低学年の部

## ペンギン

阪南市立上荘小学校　二年　川北　美波

わたしは、よくピンクは女の子の色、青は男の子の色といっていました。そうすると、ママは男の子女の子、の色はないよっていわれました。よくわかりませんでした。

そんなとき、ママから「この本をよんでみたら?」って言われて、この本をよみました。

この本のしゅじんこうはペンギンです。男の子と女の子がカップルになります。しかし、一組だけ男の子と男の子がすきになりカップルになります。ほかのカップルみたいに子どもをそだてたくて石をあたためますが、子どもができません。そのすがたをみたしいくいんさんが、だれもそだてていないたまごを石とかえてあげました。そうすると、たまごから子どもができました。そのこどもをたいせつにそだてたというはなしでした。そしてこのはなしは本当にあったはなしです。

まずおどろきました。パパとママは男の子と女の子でしかないとおもっていたからです。男の子と男の子でも、カップルになれるし、かぞくです。男の子、女の子っていうことが大切ではないと思いました。そうではなくて、おたがいをすきになるきもちがたいせつです。

この本をよむまでは、女の子は、男の子は、っていうことがたいせつだと思っていましたが、あまりたいせつではありません。それぞれのきもちがたいせつなんだなってこの本をよんで思いました。

そして、石をほんとうのたまごにかえてくれたしいくいんさんが、とてもやさしいと思いました。

わたしも、男の子、女の子にこだわるのではなくて、一人ひとりのきもちをたいせつにできる人になりたいと思いました。

「タンタンタンゴはパパふたり」
文　ジャスティン・リチャードソン、ピーター・パーネル
絵　ヘンリー・コール
ポット出版

小学校（小学部）高学年の部

# 子どもの権利ってなぁに

泉南市立雄信小学校　四年　今野　彩心

わたしは「子どもの権利ってなあに」という本を読みました。この本を選んだ理由は、子どもの権利について知りたかったからです。

この本は、世界中の子ども達が主人公の絵本です。子どもは、大人に守られるそんざいです。権利という言葉は、とてもむずかしいけどこの本はとてもかんたんに分かりやすく説明してくれます。

たとえば、雨がふっても悲しい事がおきても大きくてしっかりしたかさにみんな守られる権利がある、という所です。

一つ一つの文章が分かりやすいのでイメージもしやすいです。

他にも、平和について知る権利もあります。

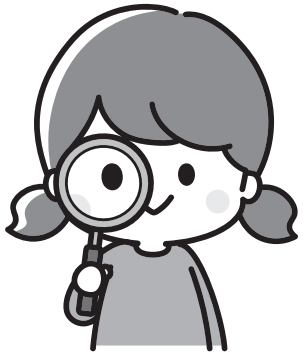
私がこの本を読んで一番心にのこったところは、こどもには大事にされる権利があるというところです。私は、この部分を読んでどんなはだの色でも、小さくても大きくても、全員大事にされる命なんだとあらためて感じました。

私は、この本から戦争から守られる権利や親とひきはなされない権利も知りました。

私が今こうして家族や友達と楽しくすごしたり、学校に通えるのは、子どもの権利が守られているからだと思います。でも、ニュースでは、まだ戦争をしている国を見ます。私が他の国にうまれていたら、戦争やミサイルにまきこまれていたかもしれません。そう考えたらとてもこわくなりました。それに、家族とはなればなれになるかもしれないし、ひどい場合一人ぼっちになるかもしれません。

私の住む泉南市には、「子どもの権利に関する条例」があって十一月二十日は泉南市子どもの権利の日です。このことについて私は考えた事があまりなかったけど、この本を読んでからすてきな事だと気づきました。これから私は、自分の権利も大事にして、友達やまわりの人の権利も大事にしていきたいです。

「子どもの権利ってなあに？」
文　アラン・セールほか
解放出版社



# 「焼き肉を食べる前に。」

阪南市立桃の木台小学校　五年　植田　孝太郎

僕は焼き肉が好きだ。なにかがん張ったときのごほうびに焼き肉に連れていってもらう。お母さんが「焼き肉好きやったらこれ読んでみ。」と言ってくれたので読んでみた。

この本は、絵本作家の作者が牛の肉やぶたの肉を「屠畜」する八人の人たちにインタビューしている。

この本の中で僕が印象に残ったのは、南港市場で働くKさんのお話だ。Kさんは、入社するまでは食肉市場で働くという職業を知らなかった。最初に見学したときは、血が大量に出ているし、ものすごいところに来たなと圧倒された。でも作業している人が牛に向かって、血まみれになりながら、真剣に仕事をしているのを見てこれは気持ちが悪いとかそんなこと言っている場所ではないと思ったそうだ。牛やぶたを切ってさばいていく仕事は、きれいに処理しないと牛を飼ってた人や枝肉を買いに来た人に迷惑がかかってしまう。Kさんは少しでもうまくなるように負けずぎらいな性格で一生懸命先ぱいのやり方を学んだそうだ。僕が衝撃的だったのは、Kさんが自分のお腹をさしてしまったという部分だ。僕は牛やぶたをかん単に処理できると思っていたけど、大怪我につながる危険と恐怖のとなり合わせの仕事なんだと驚いた。

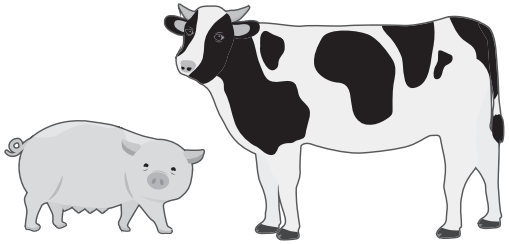
この本を最後まで読んで僕はあることに気付いた。それはどの人も自分の職業をまわりの人たちに言っていないことだ。どの人も自分の仕事にほこりを持って働いていることがすごく伝わってきた。でも昔から命にたずさわる仕事をしている人たちは差別の目で見られてきた。だから目次にならんでいる名前にはイニシャルで紹介されている人たちもいるんだと思った。

僕はどうして食肉産業で働いている人たちが差別されなければならないのか分からない。みんなふだん牛肉とぶた肉も食べている。野菜を作っている農家さんや魚をとっている漁師さんが差別されているとは聞いたことがない。ちゃんと知ろうとしない、ちゃんと理解しようとしないことが問題だと思う。



僕はこの本を読んで、今度から焼き肉がもっと美味しく感じると思う。たくさんの人のおかげで美味しく食べられる。感謝して食べようと思う。明日焼き肉に連れていってもらおうかな。

「焼き肉を食べる前に。：絵本作家がお肉の職人たちを訪ねた」
聞き手・絵　中川　洋典
解放出版社



中学校（中学部）の部

# 「手で見るぼくの世界は」を読んで

堺市立津久野中学校　一年　小西　希美

私が選んだ本は、「手で見るぼくの世界は」です。この本は、視覚支援に通うふたりの主人公がそれぞれの目標に向かっていく物語です。その物語を通して、視覚障がい者と晴眼者の関わり方を考えるきっかけをくれる本です。

私は、目が見えないというだけで悪口を言われてしまい、外を歩くことが怖くなってしまった双葉に会いにいくという目標のために苦手だった白杖の訓練に挑戦しはじめるという佑の生き方と、家の外に出ることができなくなってしまった双葉が、

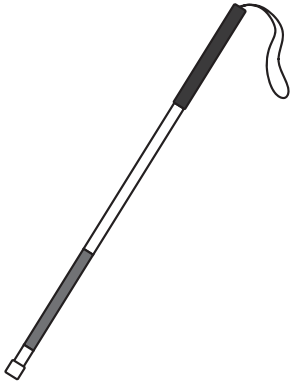
「もう一度、自由に外を歩きたい。それに、佑くんの声がききたい。」

という思いで、「伴歩・伴走クラブ」に通いはじめる双葉の生き方がとても心に残りました。

なぜなら、「双葉のために」や「佑くんのために」と大切な人のために何か新しいことをスタートさせることは、とてもすてきなことだと思ったからです。私は、あまり自分から新しいことを始めようとしないと思います。一学期の初めのころに決めた委員会では、自分の中で、学級代表になってみたいという気持ちが少しだけありました。でも、私は自分が集会などで前に立って発表できるかと考えたら、自分の中で不安が勝ってしまい、私は学級代表には、立候補できずに終わってしまいました。私は、大切な人のためにという理由ではなく、自分のためという理由でもいいからとにかく何事にも挑戦していくことが一番大切だと感じました。自分の中にある不安という感情のせいで新しいことを始めるきっかけを失い、後悔することは、もったいないことだと思うので、自分が少しでも挑戦してみたいなと思うことはどんどん挑戦していきたいと思いました。

私は、この本を読んで、晴眼者と視覚障がい者の関わり方を考えさせられました。私は、視覚障がいのある人と出会った経験が少なかったので、視覚障がいのある人が感じる困難や苦労をほとんど知りませんでした。例えば、歩行する時に、点字ブロックのない道や音が鳴らない信号機があったら、歩行することが難しくなってしまうということがあります。また、公共交通機関を利用する時に、バスや電車の行き先・切符の行き先・値段などが分かりづらく、交通機関が利用しづらいということもあります。視覚障がいのある人が少しでも快適に過ごすには、晴眼者と視覚障がいのある人が協力することが大切だと学びました。例えば、点字ブロックの上で話している人や自転車などの障害物があったら、通ることが困難になるので、点字ブロックの上で話さない、自転車などの障害物置かないや自分が点字ブロックの上に物を置いている人を見かけたら、声をかけて注意してあげるということが視覚障がいのある人が快適に過ごすことができるために私たちができる一番簡単なことだと感じました。しかし、視覚障がいの知識がないのにいきなり自分にできることを探しても、分からないし、難しいので、まずは視覚障がいのある人の生活や基本的な情報から学んでいくことから始めていくことが大事だと思いました。視覚障がいのある人のなかでも、生まれつき視覚障がいがある人、病気やけがなどがきっかけで目が見えなくなってしまった人、少しだけものを見ることができる人、光も感じない人、光を少し感じる人、見える範囲の狭い人など色々なタイプがあり、それぞれ生活の仕方が少しずつ変わってくることを知りました。このような情報を少しでも知っていることで、少しずつ自分にできることが見えてくると思います。

この本で、視覚障がいのある人と晴眼者の関わり方を学ぶことができました。これから先私も視覚障がいのある人と出会うことがあるかもしれません。そのために少しずつ視覚障がいについて理解していこうと思いました。今回学んだ点字ブロックの上で立ち止まったり、障害物を置いたりしないなど、自分に出来ることからはじめていきたいです。そして、困っている人を一人でも多く助けていこうと思いました。



「手で見るぼくの世界は」
作　樫崎　茜
くもん出版

# 桃太郎と鬼

堺市立津久野中学校　二年　山口　珠

「桃太郎」と聞くと、あなたはどんなイメージがありますか。昔話の「桃太郎」は、桃から生まれた桃太郎が、悪さをする鬼たちを退治して、鬼が盗んだお宝を持って帰る、というハッピーエンドで、いわば桃太郎は、人々にとってのヒーローのような存在として描かれていました。しかし、芥川龍之介の描く桃太郎は、横暴で身勝手で、ヒーローとは程遠い存在として表現されています。

芥川龍之介の「桃太郎」は、桃から生まれた桃太郎が鬼退治に行く、というストーリーは同じなのですが、いくつもの違いがあります。働きに行くのが面倒だから鬼退治に行ったり、犬たちにあげた団子は半分だけだったり、桃太郎の狡猾さが垣間見えるような違いが多いのですが、一番の違いは、桃太郎は悪、鬼達は善として描かれているところです。

話の中での鬼は、平和を愛していて、人間を襲ったりもせず、むしろ人間を恐れて生きていました。それに対し桃太郎は、働きたくないから、なんて理由で鬼ヶ島に行き鬼達を虐殺し、投降した生き残りの鬼に鬼退治の理由を聞かれた時は、「鬼を退治したいと思ったから」とわけが分からないことを言っており、桃太郎は侵略者かのような表現がされています。そしてこの悪行により、鬼の暮らしは一変。桃太郎への復讐に燃え、人間に悪さをするようになりました。桃太郎の屋形に火をつけたり、桃太郎の寝首をかこうとしたり、昔のように平和を愛することもなくなってしまいました。

ここからは私の想像ですが、この後いくら桃太郎が鬼退治に行こうと、鬼が桃太郎を殺そうとしても、鬼と人間との争いは絶えることはないのではないかと思います。それは、鬼も人間も互いに「自分は被害者」という考え方があるからです。確かに、先に攻撃をしてきたのは人間（桃太郎）で、しかけてきたのはそっち、自分達は被害者と鬼側は思うかもしれません。しかしそれで仕返し、と手を出してしまうと、人間側も自分達は被害者と思い、「仕返し」の仕返し、すると鬼側も「仕返しの仕返し」の仕返し、のようにいつか先に手を出した方がどっちかなんてわからなくなり、互いに「これは復讐、自分達は悪くない」と考えてしまうでしょう。

この関係をなくし、平和に生きるためには、互いに、「自分も加害者」と考えることが大切だと思います。相手がしてきたことと同じようなことを自分達もしてきたんだということを自覚し、同じ立場で話し合いなどをすることで平和的に解決することができるはずです。

これは、昔日本がしていた戦争も、同じことが言えるのではないでしょうか。まず本作は、戦争を風刺していると言われており「鬼だから殺された」と肩書きだけで差別を受けた鬼達も、過去の朝鮮人、中国人虐殺と共通しています。日本は「敗戦」という形で終戦しましたが、別のやり方があったんじゃないかと思います。互いに復讐し合ってもキリがありません。対等な立場で話し合いができていれば、犠牲ももっと少ない時に終戦できたのではないでしょうか。

戦争ほどスケールの大きいものは、私が介入できるものではありませんが、日常のケンカなどでこの考えは使えるのではないでしょうか。「自分も悪いけどあなたも悪い、このケンカはなしにしよう」と仲直りすることができると思います。

桃太郎がしたことは、絶対に許されることではありません。しかし、鬼のしたことも許されることではありません。人間も鬼も、被害者であり、加害者でもあるのです。あんなに平和だった鬼ヶ島の豹変、立て続けに起こる人間達への不幸、この全てが昔に起き、今も続いているところがあるのです。私たちに今できることは、戦争を忘れないこと、日本も戦争をして、被害を受けたこと、またどこかに被害を受けさせたことを忘れないことだと考えます。

「芥川龍之介の桃太郎」
著　芥川　龍之介
画　寺門　孝之
河出書房新社

# 人生の「色」

堺市立津久野中学校　三年　重本　美侑

「おめでとうございます、抽選に当たりました！」

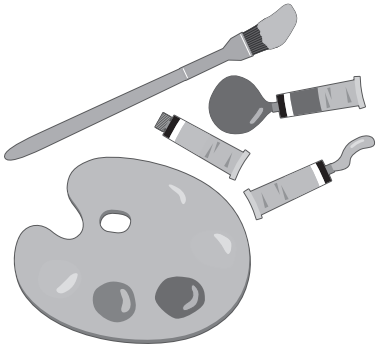
天使は、一度死んでしまった魂である主人公にそう告げた。主人公は「小林真」という自殺してしまった少年の体に入りこみ、再び人間として生きながら自分の生き方について深く考え直していく。

私はこの本を読んで、人との関わり方について考えさせられた。主人公は初め、自分のことも周りの人々のことも表面だけで判断して軽く見ていた。しかし真として周りの人々と関わっていくうちに、彼らが表には見えないそれぞれの悩み、苦しみを持っていたことを知っていく。例えば真の母親は一見明るく前向きな人に思えるが、内面を深く知っていく中で、実際は自分の平凡さについて思い悩んでいたのだと気付く。私も、他人の表面的な部分だけで判断してしまわずに、その人が抱えている本当の気持ちに対して目を向けることは大切だと感じた。さらに母親だけではなく真の父親や兄もそれぞれの問題を抱えており、真自身もそんな家族についてや学校での人間関係について悩んでいた。このような家庭の問題を見て、家族とは一緒にいるだけでなく、お互いを理解して支え合っていかなければいけないのだと考えた。

また、私は題名の「カラフル」について、人生は様々なものとの関わり、様々な「色」で成り立っているという意味に感じた。主人公は真としての生活を通じて、自分が今までどれだけ他人を傷つけて自分自身さえも見失っていたのかを思い出し、過去の自分の生き方を後悔する。私もそんな主人公の思いを読んで、過去の自分の行動について振り返った。私にも失敗や後悔はたくさんある。しかし、それをどう乗り越えて、どう変わっていくのかが重要だ。主人公は周りの人々の「色」を尊重し、自分自身の「色」も取り戻し、そして人生の「色」を見つけていく。その過程から、それぞれの価値観や生き方を尊重する大切さを学んだ。私も周りの人々の「色」を尊重することはもちろん、自分自身の「色」を大切にしていきたいと思った。また、これは現代社会においてますます重要となる多様性を受け入れるということにもつながる。自分と他人との違いは、悪いことでも直すべきことでもなくその人自身の個性であり、むしろ誇るべきことだ。「十人十色」という言葉があるように、人にはそれぞれその人にしかない「色」がある。それらと人生の中で関わっていくことで新たな視点に気づき、物事の視野は広がる。人生は彩りを増していく。だから私は、それぞれの個性について積極的に向き合っていきたいと思った。自分とは違う「色」を持った人の立場に立って、理解するとともに、それを柔軟に受け入れる。それは人と関わっていく中ですごく大切なのだと、この物語を通じて気付くことができた。一人一人の独自の色を大切にすることで、私たちはもっと豊かな人生を送ることができるのではないかと思う。私もこれから自分の好きなことや得意なことを見つけて、それを大切にしながら生きていきたい。

「カラフル」の物語を読んだことは、自分の生き方や周りの人々との関わり方について見つめ直すきっかけとなった。人生の意味についても深く考えさせられた。死んだ主人公の魂が少年の体に入りこむというのは非日常的なことだが、主人公が真としての人生を通して経験した出来事や思いは、同じ中学三年生である私たちの日常生活に通じる部分も多く、家族や友人に対する感情の揺れ動きには何度も共感した。この物語を読んで、私は他人に優しく接し、相手の内面を理解しようと努力することの大切さを学んだ。さらに、自分自身ももっと大切にしていかなければならないということにも気付いた。これからも、自分自身が持つ「色」を見つけながら、周りの人々の「色」も尊重して生きていきたい。そうすることで、お互いの人生はさらに良いものとなると思う。人間とは、人生とは、まさに「カラフル」なのだ。

「カラフル」
著　森　絵都
画　カシワイ
文藝春秋



# ぜんぶ自分の自由

交野市立第四中学校　二年　久保　夏希

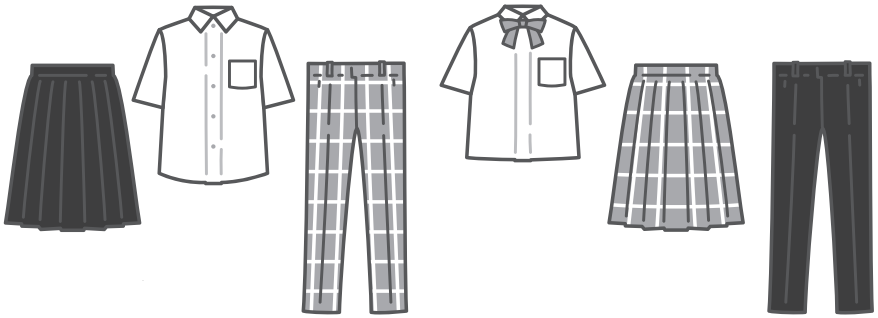
私は学校でスカートをはいています。休日はスカートもズボンもどっちもはきます。

私が最近読んだ本に出てくる笹森くんも学校でスカートをはいています。休日もスカートをはくかどうかは検討中だそうです。みなさんは笹森くんがスカートをはく理由はなんだと思いますか。「ＬＧＢＴＱ＋だから。」「女の子になりたいから。」色々思いうかぶと思いますが、正解は、「はいてみたかったから。」です。そんなものかと思ったでしょう。そんなものなんです。もちろんスカートをはいている人の中には「女の子になりたい。」と思っている人もいます。ですが、勝手な解釈や中途半端な理解はその人を傷つける原因となるのです。私がズボンをはいていることに大した理由なんてないのに、「男の子になりたいんだよね。」「わかるよ。」なんて言われたら、少しイラッとします。笹森くんのクラスメイトにもそんな子がいました。正義感が人一倍強くて「私が理解してあげなきゃ。」と思っている子が。その子は悪くありません。その子の強い正義感が人を救うこともあるでしょう。でも、それが必要ない人にそんなことをしてもお互いむくわれない結果になってしまうだけです。まずは本人に聞いてみること、ドストレートに聞くのは良くないかもしれませんが勝手に決めつけるよりましだと思います。

女の子がズボンをはくのはわりと日常化していますが、男の子がスカートをはくのは、まだ少し違和感があります。でも、夏とか暑くないですか。スカートってすごく涼しいんですよ。気をつけなければいけないことも多いけど、メンズ用のかっこいいスカートのブランドも増えています。私がズボンをはく理由がないのと同じで、男の子が理由がなくてもスカートをはいてもいいんです。夏の暑さにうんざりしたとき、色々いやになったとき、気分を変えてみたくなったとき。キッカケも理由もスカートをはくかどうかも、全部自由であなたが決めていいんです。私は久しぶりにスカートをはこうと思います。あなたは明日何を着ますか？



「笹森くんのスカート」
著　神戸　遙真
講談社



# 声

交野市立第二中学校　三年　脇田　優希

アンさんのようになりたい、そう思った。深い海の底で、長い間誰にも届かなかった、五十二ヘルツのクジラの声。その声を聞いたアンさんは私にとってヒーローだった。

「五十二ヘルツのクジラ」は世界で二番孤独な生き物と言われているそうだ。ほとんどのクジラが十五～二十五ヘルツ程度でコミュニケーションをとるのに対し、このクジラの声は五十二ヘルツ。どんなに大きな声で叫んだとしても、その声が仲間に伝わることはない。

主人公の貴瑚がまさにそうだった。両親から想像するだけで心苦しくなる虐待を受け、いつも来客用のトイレにとじこめられていた。「家族に愛されたかった」という悲痛な思いをトイレの小窓の向こうへ流していた。

正直私には、その辛さは分からない。私にとって両親は、どんなことがあっても温かく受け止めてくれるかけがえのない存在だ。両親にすら届かない自分の声が他の誰かになんて届く訳がない。私が貴瑚でもきっと同じことを思っただろう。

長い間誰にも届かなかった貴瑚の声はアンさんに届いた。心身共に限界に達し、ぼんやりと街を歩いていた貴瑚は高校からの友人、美晴と再会。アンさんは美晴の会社の先輩で、たまたまその場にいただけ。なのに誰よりも親身になって貴瑚の声を聞き、いつも貴瑚が欲しかった言葉をくれた。私はそんなアンさんに対する憧れと同時に、なぜ家族にすら届かなかった貴瑚の五十二ヘルツの声を初対面のアンさんが受け取ることができたのだろうと疑問を感じた。貴瑚自身はアンさんの神様みたいな優しさで救われたと思っていた。しかし、「優しさ」でそこまで他人に尽くし、親身になって声を聞くことができるのだろうか。

クジラは自分のコミュニケーションの範囲内の仲間の声しか聞くことができないそうだ。貴瑚の五十二ヘルツの声を聞いたアンさん。そのアンさんもまた、孤独な五十二ヘルツのクジラで、仲間に自分の声がいつか届くと信じて鳴き続けていたのではないのか…。この予想が外れてほしいと思った。優しくてかっこいいアンさんに孤独な気持ちがある訳がない、そう思っていた。

「アンさんね、トランスジェンダーだったんだ。」

美晴が言った。アンさんは女性だったが心は男性だった。しかしそれを誰にも言うことができず、遂には自死。アンさんの五十二ヘルツの声は誰にも届かなかった。貴瑚は、どうして自分の声を聞いてくれた人の声をもっと聞こうとしなかったのだろう、と後悔した。

私は貴瑚のこの言葉を聞いて、はっとした。私の声を聞いてくれる人は家族、友人などたくさんいる。しかし私はその人たちの声を聞くことができているだろうか。今まで特に考えたこともないことを、この本を読んでから意識するようになった。

インターネットで五十二ヘルツのクジラの声を聞いた。最初、とても聞こえづらかったので音量をＭＡＸにし、更にスマートフォンを耳に近づけるとかすかに高い声が聞こえた。広い海の中で、どれだけ近くに仲間がいたとしても、どれだけ大きな声で叫んでも届かない。それなのにこのクジラは鳴き続けている。広い海の中で、いつか、誰かにきっとこの声が届くと信じて。

この本を読み、五十二ヘルツのクジラの声を聞いて私が大切だと感じたことが二つだけある。それは、五十二ヘルツの声が聞こえなかったとしても、聞こうとすることである。今も世界中には、たくさんの五十二ヘルツのクジラたちがいる。誰かに声が届くことを信じて鳴き続けている。社会全体がその声を聞こうとする姿勢になることで、救われるクジラたちがいるのだと思う。子どもへの虐待やジェンダーなど、たくさんの問題がある今だからこそ、「聞こうとする姿勢」が大切だと思う。世界から五十二ヘルツのクジラがいなくなるその日まで。

「52ヘルツのクジラたち」
著　町田　そのこ
中央公論新社

# 「ないものねだり」の世界は

交野市立第二中学校　三年　田口　璃桜

「普通と特別」とは、ずっと対義語だと思っていた。あの子は何でも出来て、友達もたくさんいて、あの子ばかり愛される世界は、ないものねだりだと分かっているのに、手に入れたくて、どうしようもない。けれど「本当に、そう思うのか。」と問われてしまうと、何も言えなくなってしまう。そんなとき、家の本棚にあった一冊の本を手に取り、読み始めたことで、私は「普通と特別が共存できる世界」と出会い、遥か遠くにあるものを求めてもがく私の心が満たされる時間を、私は見つけた。影子は全てにおいて平凡で自分を永遠の脇役だと思っている高校二年生だ。そんな影子と同じクラスの普段は世間を賑わすアイドルである真昼が「特別と普通」が共存できる世界を見つけるまでの降り注ぐ光を集めたような日々が描かれている。私は、幼い頃から本を読むことが好きで、ミステリー、エッセイ、記録文学などを読んできたが、こんなにも話に引き込まれて夢中になってしまったのは初めてで、読む前の私と読んだ後の私の心情や世界観は変わった。それは、きっと読んできた本が面白くなかったということではなく登場人物たちが繰り広げる悩みに世界観が同じだったからこそだろう。大事なものは大事にしないと、失ってしまうかもしれないという不安や恐怖、持って生まれなかったものに焦がれ、何とか手に入れたいと願う心に、二人を見守るというよりは、導かれるような、感覚にされてしまった。二人のお互いを思いあう世界に、全ての「普通」は、大勢の脇役で影に生きる人なのだろうか。全ての「特別」は、世界の中心で輝く光に生きる人なのだろうか。どちらも唯一無二で、人としての個性であって、光と影であり、よいところと、悪いところでもあると思う。人生や考え方も表裏一体であり、どっちも認めたいし認めて欲しいという純粋な願いに共感し、気づかないまま、心地よい「ないものねだりの世界」に落ちてしまっていた。

私は、真昼のように、普通に憧れるという気持ちが分からない。だからこそ、特別なんてなれない、光の当たらない場所で影として生きる脇役なんだと諦めている影子の考えに共感していた。けれど、少し前からは、私の人生にとっては、間違いなく、私が主人公であり、お母さんや、お父さん、妹にとってはたぶん私はなくてはならない人物で、立場を変えても変わらず一緒なんだと感じている。この小説の中にある「影というと暗いイメージかもしれないが、光を際立たせるためには、絶対になくてはならないものだろう。」という考えは、「普通」と「特別」、「影」と「光」が正反対のようで同じだと感じられた。ないものねだりの世界は、自分にはない何かをもっている、その人にとっての「欲しいもの」を羨むだけで、その立場だからこその痛みなんて気づかないか、気づかないように目をそらしてしまう。そのことに気がついた上で得られないものに惹かれあっていく人たちこその関係がいいなと思う。どうしても、ないものねだりをしてしまい、落ちこみ、羨んでしまうこともあるけれど、一度立ち止まり考えてみる。ずっとずっと誰かにとって欲しいと思っているものが目の前にあり、当たり前のようにあって、何てこともない日々を生きていると思うと心が、軽くなる。それを大事に抱きしめて生きていきたい。

自分という存在と、自分を取り巻く世界から逃げ出したくなると思っていた影子が、真昼との出会いで、「普通」の、でも「特別」な愛情をもらってたものを、今度は真昼にあげたいと思っている姿があることが、私にはうれしかった。「普通」と「特別」が「光」と「影」に支えられ、惹かれあっている人たちに、お互いが気づいてこそ、初めて成り立つのではないかと、やはり思う。「光」である人と「影」である人がもっているものを受け入れて受け止めるのと同時に、自分のもっている「普通であり特別」な「もの」を大事にしたいと思う。

また、恐らく影子と真昼は本当の友達になっているのだろう。お互いにとっての孤独な日々に光を与えあう存在と出会い、時に失敗や困難を乗りこえてきたのだから。二人は、互いを思いやりながら愛しあっている情が存在している。生い立ちや環境が全く似ていないけれど「ないものねだりの世界」を通じて過ごしてきた関係だから。

ないものねだりをしているのに、本当にそう思うのかと問われると言葉が出なくなってしまっていた私が、この瞬間に出会えたことは奇跡だ。一人一人自分を軸としているから「普通」を一概に定義することはできないというのが世の中の結論なんだろう。ないものねだりばかりしていたが、これからは自分と向きあっていきたい。「ないものねだりの私から、ないものねだりの君へ。」

「ないものねだりの君に光の花束を」
著　汐見　夏衛
KADOKAWA

# 人からの評価

阪南市立鳥取中学校　三年　東條　智佳

私は、「ただ、それだけでよかったんです」という本を読んだ。この本は、とある中学校で男子生徒がいじめによって自殺したところから始まる。その男子生徒が残した遺書には「菅原拓は悪魔です」と書かれていた。自殺した生徒のほかに、三人の生徒、合計四人を目撃者なしでいじめていたという。話は、真相を知るために動く、男子生徒の姉である岸本香苗と、悪魔と呼ばれた菅原拓、二人の視点が交互に入れ替わり、進んでいく。

この話の中では、「人間力テスト」と呼ばれている制度がある。人間力テストは、生徒同士で互いの性格を採点するというもの。つまり、元々互いを評価し、個人の中で良い悪いを決めていたのが、全体の中で、自分の評価が数字として明確に表されるようになったということである。

話の中でも言われているが、人は他人の評価から逃げられない。そこに私は共感した。学校での成績、高校受験での試験、高校に進学すればクラス内での順位、社会に出れば社内評価など。中学生として生活している今も、人から評価され、その評価を気にしながら、また自分自身も人を評価している。私も含めて人は、無意識のうちに人を評価し、人からの評価を何となく知り、態度に出してしまう。

人間力テストは、いじめの二つの要因として深く関わっているが、原因はそれだけではない。いじめは、自分自身の気持ちを満たしたい、不満やストレスを他の人にぶつけて解消したい、という精神的な原因、家族との関わり方や学校内での風潮といった環境的な原因の二つに分けられるのではないかと思われる。

常に誰かが自分のことを評価している、今自分がいる環境が辛いなどといった状況に立たされている人は多いだろう。このような中で、いじめをなくすことはとても厳しいことだと考える。だから私たちはなくすではなくその人の抱えている辛い気持ちを軽くする、いじめを減らすことをめざして、いじめに苦しんでいる人をサポートすべきだと思う。

「人をいじめることは間違っている」と分かっていても周りに流され、いじめに加担してしまったり、嫌だとはっきり言えないという気持ちは理解できる。だからと言って、いじめが目の前で起こっているのに、見て見ぬふりをすることは決して許されない。行動に移すことができないとしても、心の底で「これは良くないこと、おかしいことだ」と思ってほしい。そして、自分にできることが何かないだろうかと考えてほしい。

他人の評価や個人の感情に左右され、その人をいじめの対象にすることはあってはならない。人の一面だけを見て相手を知ったつもりになるのではなく、相手を理解しようとする気持ちを大切にすることを考えさせられる本だった。

「ただ、それだけでよかったんです」
著　松村　涼哉
KADOKAWA

# 講　評

審査委員長　池上　英明
（大阪教育大学）

今年度より審査委員長を務めることとなりました大阪教育大学の池上でございます。

どうかよろしくお願いいたします。

さて、「第43回人権啓発詩・読書感想文」には、大阪府内から1，052点の応募がありました。内訳は詩部門750点、読書感想部門302点です。

多くの皆さんが応募して下さったことに感謝しますとともに、30人の方の入選をお祝い申し上げます。

審査では詩と読書感想文の部門ごとに、小学校（小学部）低学年・高学年、中学校（中学部）に分けて、「人権啓発に資するものとなっているか」「人権に対する深い認識があるか」などを基準に、子どもたちの心情や背景に想いを馳せながら意見交換を行いました。

講評にうつります。まず、人の尊厳、ジェンダー、障がい者、性的マイノリティ、高齢者、子ども、（職業）差別の問題、平和と人権等、人権に関わるテーマを幅広く取り上げた作品がありました。審査では、これらの課題を自分事としてとらえている作品には、読む者を惹き付ける力があるという意見が多く出ました。「ジェンダーを巡る課題にふれつつ、自分の経験をふまえた意見が述べられていた。読む人によっていろんな考え方ができる作品だと思う」「自分の心の内を素直に表現した作品で心打たれた」などです。

また、私たちのくらしの中にある「ふつう」という感覚を問い直す作品もあり、私たち大人も人権課題を前にした時に考えていくべきことだと感じています。

一方、平和と人権を巡る厳しい状況を踏まえ、子どもたちからの鋭い問題提起もありましたが、そのうえで「自分はどうするのかという内面の問いかけを言語化できればさらに心に迫る作品になる」という意見もありました。

おわりに申し添えておきたいことがあります。それは選外となった作品からも学ぶべきものがたくさんあったということです。

「この発想はどこからきているのだろう?とても印象深い作品だった」「読んでいてリズム感がある」などの意見がありました。

作品を応募して下さった方にはこれでくじけることなく、来年も応募していただきたいと思います。また、低学年の応募作品が少ないようなので、多くの作品を見てみたいと思っております。どうかよろしくお願いいたします。

最後になりますが保護者の方々をはじめ教職員の方々には、これまでご指導、ご支援くださり本当にありがとうございました。この作品集が大阪府内の各学校等において活用され、子どもたちの人権感覚の醸成に寄与できれば幸いです。